

地域と連携した課題研究の実践

～その効果的指導法と評価について～



長崎県立島原商業高等学校教諭 中村 摂也

1. はじめに

本校では平成14年度より、全体目標に「島原を知る」を設定して、生徒に課題を設定させ、各グループとも地域と連携した課題研究に取り組んできた。これは特色ある学校づくり、魅力ある学校づくりの一環として、地域に根ざし、地域と共に歩んできた本校が、今まで以上に地域と関わり合いを持つ存在になること、また、なるべきことを前提とした全体目標である。

しかし、課題研究を実施する上では、環境整備や地域との連携の在り方、さらには評価をどうするかなど、様々な問題点がある。そこで、このような問題を少しでも解決するために「地域と連携した課題研究の実践」と題して取り組むこととした。

2. 本校の概況

城下町島原。その象徴である島原城の隣に位置する本校は、昭和31年、県立島原高等学校より分離独立し、商業科10学級、家政科3学級を有する県立島原商業高等学校として発足した。その後、平成元年度に情報処理科、平成10年度に国際経済科が新たに設置され、現在に至っている。創立以来、時代に即応した有為な人材の育成に努め、平成18年度には創立50周年を迎える。

3. 平成16年度課題研究講座

島原の観光調査・研究	空き店舗の復活
郷土芸能による地域への貢献	地元事業所のHP作成
地域経済の研究	商業音楽の研究
地域へのパソコン指導	職場実習
中国経済を知る	チャレンジ日商簿記

ここで、講座の内容をいくつか紹介する。

○「郷土芸能による地域への貢献」

郷土芸能である不知火太鼓の演奏技術を習得することにより、観光地でPR活動を行ったり、各種イベントや地域の祭り等に参加したり、地域の経済や



島原城での演奏

開店セレモニーでの演奏

地域社会に貢献することを目的に活動している講座。

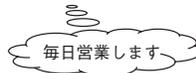
○「空き店舗の復活」

商店街の活性化を目標に、昨年度初めて空き店舗に島商生の店「島商ッブ」を10月に開店し、毎週土曜日計10回の営業を行った。



地元事業所のHP講座生徒作品

今年度は空き店舗活用コミュニティ貢献事業ということで、県から50万円、市から50万円の助成金を受け取り組むことにしている。9月17日に開店し、10月11日からは、日曜や期末考査期間中を除きほぼ毎日営業し、12月24日まで計56回の営業を予定している。



オープニング
セレモニー



○「商業音楽の研究」

地元企業の宣伝用音楽や島原一番街アーケードの歌、島商ッブの歌などを作成するなど「商品としての音楽」や「宣伝手段としての音楽」について研究を進めた。

毎週土曜は島商ツプ 一番街にお店が出たよ
島原商業島商ツプ 毎週土曜は島商ツプ

島商ツプの歌一部（聴いていただけなのが残念である）

4. 発表会等

- ①平成15年 1月（課題研究発表会）
- ②平成16年 1月（県商研指定中間発表会）
- ③平成16年12月（県商研指定本発表会）
- ④平成17年 2月（島原商工会議所で発表）



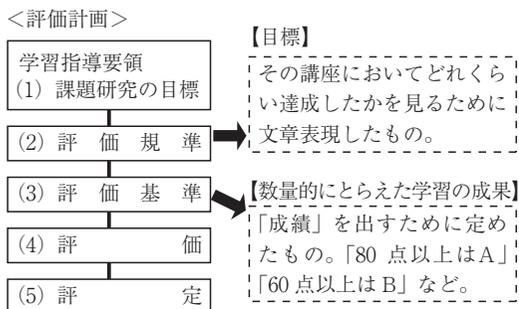
島原文化会館で発表
(外部評価・講評)

島原商工会議所で発表
(CMソング作成依頼)

5. 評価について

課題研究の評価を行うことはとても大変なことがある。生徒が熱心であればあるほど、全員に5をやりたいという思いがあるし、生徒の顔を思い浮かべながら、「この子はちゃんとやっているから5」だとか、「この子は提出物が遅いから3」だとか、あいまいな基準で評価をせざるを得ないというのが現状だと思う。その中で、誰が見てもわかりやすく、かつ公正に評価を行えるような流れを作り上げたのが島原商業高校商業科の研究成果である。

(1) 課題研究の目標から評価・評定までの流れ



(2) 評価規準

①評価の観点（全講座共通）

関心・意欲・態度	商業の各分野に関心を持ち、自ら課題を設定し自ら学び、自発的・創造的態で考えることができる。
----------	---

思考・判断	実際の場面に応じて自ら考え、主体的に判断し、応用・発展できる柔軟性のある考え方ができる。
技能・表現	問題解決を通して技術を深め、その成果を的確に表現することができる。
知識・理解	商業に関する各科目の学習で身に付けた専門的な知識を理解し、総合的に活用できる。

②年間の評価規準（各講座ごと）

(例) 地域経済の研究講座

関心・意欲・態度	島原の経済の現状について関心を持ち、経済活性化の方策を探るための知識や情報を積極的に探することができる。
思考・判断	島原における経済の現状を客観的に分析し、それら諸問題について集めた情報を精選し、論理的に組み立てることができる。
技能・表現	情報収集のために必要な手段方法とその入手先を考えることができる。ダイヤモンドランキングのような思考方法を適宜活用できる。プレゼンテーションソフトを効果的に使い、相手にわかりやすく伝えることができる。
知識・理解	経済に関する基礎的な知識を身に付け、情報の取捨選択を的確に行い、地域経済の理解に役立てることができる。

③段階（単元）ごとの評価規準

本校では、課題研究の評価を、4つの段階に区分して行うようにしている。そこで、各講座の年間評価規準をもとに、段階ごとの評価規準を作成した。

(例) 地域経済の研究講座

	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
課題設定期	地域経済の現状に関心を持ち、その課題に気がつくことができる。	地域の活性化という課題解決を効果的に行うための計画をおよび手順を考えることができる。	自らの考えを、他の班員に理解させることができるとともに、情報の収集手段を数多く知ることができる。	地域経済の現状について分析を加え、理解することができる。

課題追究期	鳥原市の財政、観光客数などに関心をもち、そこから課題解決の方策を考えたとする。	地域経済について調べた事実をもとに、自分なりに考え意見を持つことができる。	地域経済に関する自分の考えを、第三者にもきちんと伝えることができる。	地域における課題を理解するとともに、その課題を抱えるに至った理由をまとめることができる。
表現・発表期	地域経済に対する自らの考えを、第三者に理解させるために、適切な表現を使ってまとめるようにする。	地域経済の諸問題を分析し、自らの考えを表現することで、更に思考を深めることができる。	地域経済発展に関する自分の主張を、コンピュータなどの機器を用いて視覚的に表現することができる。	地域経済活性化のために立てた方策が有効なものかどうか検討を加え、地域経済に対する理解をより深めることができる。
まとめ期	自らの考えに足りなかった点を振り返り、他班の良いところにも目を向け、自分の中に取り込もうとする。	地域経済の今日的な課題が我々の生活に及ぼす影響について考え、それを克服するための心構えや様々な工夫について考え、判断することができる。	鳥原の課題について様々な資料を基に、論理的に説明することができる。	地域経済発展のための方策をまとめるにあたり、思い込みによって論理展開を図るのではなく、情報を適切に収集精選し、その論拠として示すことができる。

(3) 評価の単元と評価方法 (評価基準)

学習課程を4つの段階に区分して評価を行う。

- ①課題設定段階：自らの興味関心に基づいて課題を設定する時期

関心・意欲・態度	意欲的・主体的取り組み状況、年間計画表・課題研究ファイルの提出状況
思考・判断	年間計画表、学期別・月別の計画の作成
技能・表現	創意工夫の程度
知識・理解	課題設定の意義、目標、方法の理解の程度

- ②課題追究段階：自らの課題について考え、調査・研究する時期

関心・意欲・態度	主体的・積極的な取り組み状況及び成就させる意欲の状況、探究的・創造的態度で課題解決する状況、記録ノートへの適切な記録状況、出席状況
思考・判断	課題追究について、適切な方法や資料の活用などの程度
技能・表現	これまでに学習した知識・技能を応用しての計画に沿った実践状況
知識・理解	追究した内容をこれまでに習得した学習と結びつけた関連知識の深化の程度

- ③表現・発表段階：研究内容を発表する時期

関心・意欲・態度	発表に対する積極的な取り組み状況、出席状況
思考・判断	適切な発表内容についての判断の程度
技能・表現	既習の技術を活用しての表現の程度、創造的な工夫の程度
知識・理解	課題追究してきた内容・発表方法についての理解の程度

- ④まとめ段階：研究内容を報告書にまとめる時期

関心・意欲・態度	工夫してまとめあげる努力の状況、実践結果をもとにした将来への意欲の程度
思考・判断	実践結果を的確に判断できる考え方の程度、的確な自己評価ができる程度
技能・表現	記録ノートの適切なまとめ方の程度、学習成果報告書のまとめ方の程度
知識・理解	課題解決法の理解状況、学習方法・新しい知識の習得の程度

- ⑤評価の材料

学習のねらい・目標に関する記録の部分	研究題材、研究内容、題目設定の理由、実施計画の概要、実施方法の概要
年間実施計画に関する記録の部分	年間計画表、月別実施計画、実施事項
毎時の実施に関する記録の部分	課題研究ファイル：実施記録、時間、本時の計画、実施内容、次時の計画、本時実施後の自己評価・反省・感想、担当教師に対する質問事項
発表に関する記録の部分	発表資料、発表後の自己評価・反省・感想、外部評価、相互評価
研究のまとめに関する記録の部分	報告書：実施内容及び結果・考察、反省・感想

<各講座の評価基準作成の留意点>

講座により評価の観点が偏ることがないように、各講座担当者の評価に対する共通理解のもとで、基

準作成を行うようにした。

(4) 評価

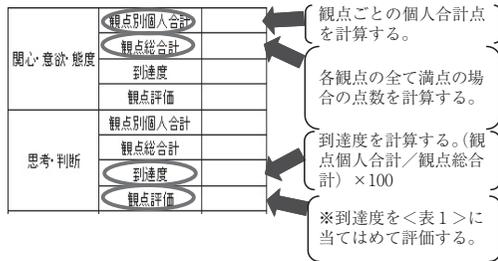
＜観点別の評価から評定への総括＞

- 1) 段階ごとの評価を集計…… **評価シート**
- 2) 集計結果を基に評価

(Aは8割以上, Cは6割未満, それ以外Bとする)

判定基準	評価
80%以上	A
60%以上 80%未満	B
60%未満	C

表 1



(5) 評定

観点ごとにA=3点, B=2点, C=1点とし合計点を求め、<表2>によって評定を決定する。

観点の総計	12, 11	10, 9	8, 7, 6	5	4
評定	5	4	3	2	1

表 2

※ 2つの段階を経ての評価

1 学期	課題設定段階の評価, 課題追究段階の評価
2 学期	課題追究段階の評価, 表現・発表段階の評価
3 学期	まとめ段階の評価
学年評価	<p>1. 授業時数を用い、各学期の比重を計算する。 学期ごとの比重 = 学期の授業時数 / 総授業数</p> <p>2. 総合評定 (観点ごとに算出する)</p> <p>① 各観点別学年到達度 = 1学期到達度 × 1学期比重 + 2学期到達度 × 2学期比重 + 3学期到達度 × 3学期比重</p> <p>② ①を(4)の<表1>に当てはめて評価する。</p> <p>③ 観点ごとの A=3点, B=2点, C=1点とし合計点を求め、<表2>によって評定を決定する。</p>

(6) 評価の実例

① 評価シートの概要

本校では、4つの段階ごと・観点ごとにエクセルで評価算出のためのシートを作成した。

まとめ段階の評価シート

(評価項目) (評価の場面・方法) (教師評価欄)

学年末評定	到達度				
関心・意欲・態度	12	11	10, 9	8, 7, 6	5
思考・判断	12	11	10, 9	8, 7, 6	5
知識・理解	12	11	10, 9	8, 7, 6	5
表現・発表	12	11	10, 9	8, 7, 6	5
総合	12	11	10, 9	8, 7, 6	5

(学年末評定) (集計)

以下、評価シートの一部を使って評価を出す手順を説明する。

② 評価……その1 (例)「知識・理解」分野

評価項目	評価の場面・方法	生徒1	生徒2	生徒3
活動の記録を目的に応じて適切に記述することができる。	課題研究ファイル	3	3	3
適切な内容である。	小項目	○	○	○
毎時間の反省がなされている。		○	A	○
次回への見通しがある。		○	○	A
自分と地域とのかわり方を考えることができる。	質問・応答・作文	2	2	3
地域の現状を理解できる。	小項目	○	○	○
地域の問題点を考えることができる。		○	B	○
地域と関わるための方法を考えることができる。		○	○	A
課題の解決方法を考えることができる。	自己評価表	3	2	3
自分なりの解決方法を考えている。	小項目	○	○	○
班員との協力のもとに解決方法を考えることができる。		○	B	○
教師との連携のもとに解決方法を考えることができる。		○	○	○

第一段階

①大項目の中に3つの小項目を設定
②小項目が 達成されていたら………○ 達成されていなかったら………空欄
教師評価部分
③○の数が, 項目ごとの判定
3個【判定A】 2・1個【判定B】 0個【判定C】
④判定が, 観点別個人合計
判定A【3点】 判定B【2点】 判定C【1点】

第二段階

①観点別個人合計（各観点における大項目の点数を足し合わせる） (生徒1の場合 3点+2点+3点=8点)								
②観点総合計「知識・理解」分野の場合、 (3点×3項目=9点が満点となる。)								
③到達度=①観点別個人合計÷②観点総合計×100 (生徒1の場合 8点÷9点×100=88.9%)								
④観点を評価（③で出た到達度を（4）の<表1>の基準を用いて評価）								
<表1>								
<table border="1"> <tr> <th>判定基準</th> <th>評価</th> </tr> <tr> <td>80%以上</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>60%以上 80%未満</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>60%未満</td> <td>C</td> </tr> </table>	判定基準	評価	80%以上	A	60%以上 80%未満	B	60%未満	C
判定基準	評価							
80%以上	A							
60%以上 80%未満	B							
60%未満	C							
(生徒1の知識・理解分野における評価は“A”となる。)								

③評価……その2（例）「知識・理解」分野
(学期の評定) …… (例 1学期)

1学期は、(5) 評定に書かれているとおり「課題設定段階」と「課題追求段階」の2つの段階で評定を出すので、1学期の評定を出す際にはこの2つの段階の数字を足し合わせる。

<table border="1"> <tr> <th>一 課題設定期</th> <th>生徒1</th> <th>生徒2</th> <th>生徒3</th> </tr> <tr> <td>観点別個人合計</td> <td>8</td> <td>7</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>観点総合計</td> <td>9</td> <td>9</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>到達度</td> <td>88.9</td> <td>77.8</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td>観点評価</td> <td>A</td> <td>B</td> <td>A</td> </tr> </table>	一 課題設定期	生徒1	生徒2	生徒3	観点別個人合計	8	7	9	観点総合計	9	9	9	到達度	88.9	77.8	100	観点評価	A	B	A	<table border="1"> <tr> <th>一 課題追求期</th> <th>生徒1</th> <th>生徒2</th> <th>生徒3</th> </tr> <tr> <td>観点別個人合計</td> <td>8</td> <td>6</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>観点総合計</td> <td>9</td> <td>9</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>到達度</td> <td>88.9</td> <td>66.7</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td>観点評価</td> <td>A</td> <td>B</td> <td>A</td> </tr> </table>	一 課題追求期	生徒1	生徒2	生徒3	観点別個人合計	8	6	9	観点総合計	9	9	9	到達度	88.9	66.7	100	観点評価	A	B	A
一 課題設定期	生徒1	生徒2	生徒3																																						
観点別個人合計	8	7	9																																						
観点総合計	9	9	9																																						
到達度	88.9	77.8	100																																						
観点評価	A	B	A																																						
一 課題追求期	生徒1	生徒2	生徒3																																						
観点別個人合計	8	6	9																																						
観点総合計	9	9	9																																						
到達度	88.9	66.7	100																																						
観点評価	A	B	A																																						

※ 4観点全部の換算点合計 →(5)評定<表2>より評定は“4” (5)評定のところに書かれている文章より

④評価……その3
(年間の評定)

単純に1～3学期の成績を足し合わせて3で割り、それを1年間の成績とはせずに、授業時数によって比重の計算つまり重み付けを行い評価を行うところに特徴がある。

学年末評定		生徒1	生徒2	生徒3	生徒4
※1 1学期到達度 0.418 2学期到達度 0.509 3学期到達度 0.073	関心・意欲・態度 1学期到達度 0.279 2学期到達度 0.359 3学期到達度 0.58 学年到達度 0.84	27.9 35.9 5.8	※2 37.3 5.9	35.0 44.1 87.0	39.0 49.2 93.8
	思考・判断 1学期到達度 0.418 2学期到達度 0.509 3学期到達度 0.073	30.6 38.2 74.5	30.6 35.3 76.6	40.4 42.4 86.5	39.0 40.3 85.9
	技能・表現 1学期到達度 0.418 2学期到達度 0.509 3学期到達度 0.073	31.4 43.987 64.887	27.8 40.3128 64.887	41.8 46.793 5.6794	39.0 46.6793 5.6794
	知識・理解 1学期到達度 0.418 2学期到達度 0.509 3学期到達度 0.073	37.2 45.458 5.6794	30.2 47.29 6.927	41.8 42.612 5.6794	41.8 46.065 4.8891
換算点合計	10	8	12	12	
学年末評定	4	※5 5	5	5	

第一段階→※1 比重の計算 (各学期の授業時数)

1学期 23時間 / 55時間 = 0.418
(小数第4位四捨五入, 以下同じ)
2学期 28時間 / 55時間 = 0.509
3学期 4時間 / 55時間 = 0.073

第二段階→各観点の観点評価の算出「関・意・態」の場合

①学期ごとの到達度に比重をかける
生徒1の1学期成績によると「関心・意欲・態度」の到達度は66.7%×1学期比重0.418 = 27.9
※2「関心・意欲・態度」の1学期到達度
※これを2学期、3学期と繰り返す。
(生徒1 = 27.9 35.6 5.8)

②学年到達度の算出
(生徒1 = 27.9 + 35.6 + 5.8 ÷ 69.4%) ※3

③1年間の観点評価を出す ※4
(生徒1 = 評価B 点数は2点)

判定基準	評価	評価	点数
80%以上	A	A	3点
60%以上 80%未満	B	B	2点
60%未満	C	C	1点

④「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の3観点においても①～③の手順を繰り返す。

第三段階→学年末評定の算出 ※5

①各観点において出した、観点評価を足しあわせる
2(関心・意欲) + 2(思考・判断) + 3(技能・表現) + 3(知識・理解) = 10 (学年末観点評価)

②学年末評定 (学年評価) ※5
この換算点を次の表にあてはめ、評定を出す。

観点の総計	12, 11	10, 9	8, 7, 6	5	4
評定	5	4	3	2	1

10点 = 評定4

(7) 評価の総括

新評価法では、評定は高めになったが、評価とは「教育改善の方法」であり、いわば「発達を促す評価」であるので、評定が高めになる傾向そのものよりも、評定3しか取ることができなかった生徒や、評価の中でCが多くついている項目に目を移し、どこが弱いのかを抽出し、その指導法を変えるなどの、逆の視点こそが必要とされるのではないかと考える。

(8) 新評価法の特徴とまとめ

今回、我々が作成した評価法の特徴は、

1. 講座間で評価による不公平感が出ないように全講座共通の評価項目を作成した。
2. 生徒に公平な評価かつ、教師の負担軽減をはかるシステムにした。
3. 授業日数による比重を評価に反映させた。

この評価法を導入した結果については、

1. 指導において今まで気がつかなかったことが分かった。
2. 生徒の実態に合わせ指導法を変えることができた。

これからの課題としては、

1. 講座の適性に合うかどうか項目の再検討が必要である。
2. 各講座の特色を評価の中へ生かすにはどのような工夫をすればよいか。

研究の続行が不可欠である

6. まとめ

(1) 講座間の連携

地域と連携した課題研究を実践することで、生徒たちに、地域への関心が芽生え、学習に対する動機づけという点では、有効であった。また、図のよう

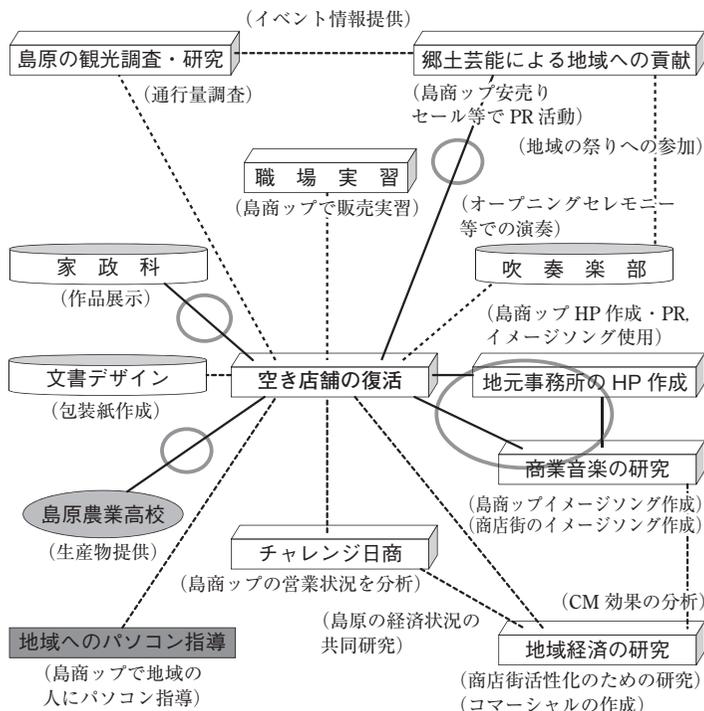


図 講座間の連携 (○平成16年度連携分)

に講座間の連携を意識させることで、一層の学習効果が期待できる。

(2) おわりに

日頃地域の方々は商業の教育内容を理解されていない面があり、商業高校生に残りのためにも、しっかりと地域との信頼関係を築き、開かれた学校、地域の学校となるよう努力していきたいと思う。

〈平成17年度 研究構成メンバー〉

校長 権藤 哲郎 教頭 古賀 雅治
商業科

伊藤俊信 定方幸彦 宮崎伸一 林田成穰
富永秀之 峯 健吾 大浦正文 福有一歩
君野里絵 黒木将昭 松本 優 森田美加
中村撰也